同年九月、彼は再度沖縄出張を命ぜられ、沖縄、奄美大島、宮古島、八重山諸島で調査を行い、昭和二年九月、八重山より台湾へ渡り、上海を経て帰国し母校に復職した。その後、昭和五年に講師となり、「風俗史」「東洋絵画史」「東洋彫刻史」等の授業を担当し、同十七年に助教授に任ぜられたが、同十九年の学校改革の際に辞職。苦境の中で工芸作家の道を歩み、昭和四十八年には重要無形文化財「型絵染」保持者に認定される。

⑤ 三木栄川の奨学金寄付

大正十三年五月一日、卒業生にしてバンコック在住の三木栄川（本名栄）より漆工科技術奨励のための奨学金千円が寄付された。これまでの奨学金寄附額（巻末表参照）は川端奨学金の千五百円を除いた外は三百円以下であり、栄川の寄付は川端（玉章遺族）家のそれに次ぐ額であった。

三木栄川の名は『東京美術学校校友会月報』の論説欄や通信欄に頻繁に登場する。彼は明治十七年群馬県前橋市に生れ、同四十三年三月本校漆工科を卒業、翌四十四年二月暹羅（タイ国）に渡り、同国宮内省技芸局、宮内省美術局に勤務して宮殿や寺院の室内装飾、諸器物の製作に携わった。その業績は左の叙勲内申案（昭和三年一月本校作成）に明記されている。ただし、この文書には「本内申ニ対シテ叙勲ノ沙汰ナシ」と記入されている。

案

叙勲内申

東京美術學校卒業者　三木榮

右者明治四十三年三月本校漆工科ヲ卒業シ翌四十四年暹羅國ニ渡航シ同年十月始メテ同國宮内省技藝局ニ勤仕シ大正三年四月ニ至リ同國宮内技師ノ本官ニ任叙セラル　爾来勤績シテ今日ニ逮ビ前後通ジテ十七年間ノ久シキ同國ニ在留シ其間職務ニ勵精盡瘁シ暹羅宮殿寺觀等ノ装飾ヨリ皇室寶藏物、調度品等ニ至ルマデ一切ノ髹漆螺鈿ニ関スル修繕、新作、意匠考案等ヲ擔当シテ多大ノ功績ヲ擧ゲ同國皇帝ノ寵任ヲ荷ヒ朝野人士ノ信望ヲ厚フシ大正十三年一月一日ヲ以テ同國ノ勲五等ニ叙セラレ王冠章ヲ授與セラレタリ此外同人ハ勤務ノ餘力ヲ以テ夙ニ日暹両國間交通史ノ資料及暹羅美術工藝ノ蒐集研究ニ専念シ「日暹史話」「暹羅ノ美術工藝研究」外數種ノ述作編纂アリテ其文献上ニ裨益スル所亦尠カラズ　又母校タル本校ニ對シテハ其ノ暹羅ニ於テ蒐集シタル美術工藝品ノ参考資料トナルベキモノ多數ヲ送付シ来リ寄附スルコト前後數回ニシテ絶エズ　就中大正十三年ニハ現金壱千圓ヲ寄附シテ本校生徒ノ奨学資金ニ供シ昭和二年ニハ暹羅古代佛畫佛像等六十七点評價壱千圓餘ニ上ルモノヽ寄附アリ　是尤モ著シキモノナリ

以上概述セシ所ノ如ク同人ガ暹羅國宮内技師トシテ盡瘁シタル功績ハ既ニ同國ニ於テ勲五等ニ叙セラレタル事實ニ徴シテ著明ナルベク延イテハ多年ニ亘リ直接間接ニ日暹両國親善ノ隣誼向上ニ與カリテ補翼貢献シタル功勞モ亦尠ナラザルベキヲ察知シ得ル所ナリ　同人ノ如キハ實ニ海外ニ於ケル邦人成功者ノ一人ニシテ且模範的人物トシテ啻ニ本校ノ聲名ヲ海外ニ播スルノミナラズ又暹羅ニ於ケル一般在留邦人ノ為ニモ重ヲ致ス所アルヲ疑ハズ　右ノ次

第ナルニ付我國家ニ於テモ同人ガ暹羅ニ於ケル功勞ヲ認メラレ此際相当叙勲ノ御詮議相成候様有之度茲ニ事情ヲ陳ジ及内申候也

添付書類

一　三木栄履歴書　壱通

一　勲章受領証明書　壱通

年　月　日　東京美術学校長

文部大臣宛

栄川は昭和五年、暹羅滞在二十年を機として九ヶ月の休暇を貰って帰国し、各地で講演や将来品の展覧会を行い、『暹羅の芸術』（同年十月、黒百合社。正木直彦も序文を寄せている）を出版した。同年十月二十五日、二十六日には本校会議室で暹羅古美術展覧会を開催し、二十五日には大講堂で「暹羅の芸術」と題する講演を行なっている。彼が寄贈した「シヤム仏教美術及工芸美術写真」は東京芸術大学附属図書館に収蔵されている。

三木奨学金の使途については『東京美術学校校友会月報』第二十六巻第三号に次の記述がある。

漆工科の催（三木榮氏寄附金の使途）〔中略〕寄附金の使途に就ては協議研究の結果該金の利子を以て漆工技術奨勵にあて元金は長く之を保存して同氏の美擧を永久に傳ふることゝせり　而して今年度は最初の試みとして漆工科在校生全部に寫生帳を與へ學校家庭の餘暇に於て務（努）めて草花の寫生を行はしめ其れを第一學期末教室に集めて展觀し渡邊教授、和田助教授も特に臨席、漆工科教官と共に審査しその内左記四名を撰んで賞金を授與したのである、審査の方針は二種に分ち（一）の部は寫生そのもの優秀なるもの、（二）は熱心なるものとしたり。

（一）　一席　安倍郁二（本科三年）

（挿繪參照〔省略〕）

二席　川村　源（本科三年）

（二）　一席　熊谷　茂（本科一年）

（挿繪參照〔省略〕）

二席　長谷川省吾（選科二年）

尚此れは今後毎回之を續けその他目下考案中のものとしては實習競技優秀者に對する材料費補助古美術見學旅行費の補助、特別研究の生徒派遣（遣）費、參考品の購入等、何れ其れ等の實行に際しては改めて報道すべし。

⑥ 黒田清輝の死去

月報抜粋にもあるとおり、西洋画科主任教授にして帝国美術院長、貴族院研究会所属議員、子爵の黒田清輝は、慢性腎臓炎および糖尿病により大正十三年七月十五日に麻布区笄町百七十七番地の邸内において死去した。十九日に青山斎場で神式による告別式が行われ、遺骨は黒田家の菩提所である麻生笄町長谷寺に埋葬された。黒田の死去により西洋画科主任は岡田三郎助となった。

黒田は本書第一巻（319～332頁）に記したとおり本校西洋画科の発足にあたって多大の尽力をなし、以来二十八年間同科を指導し、その間、文展開設以来審査委員をつとめ、最晩年に至って帝国美術院